

ガーデン

シティクラブ

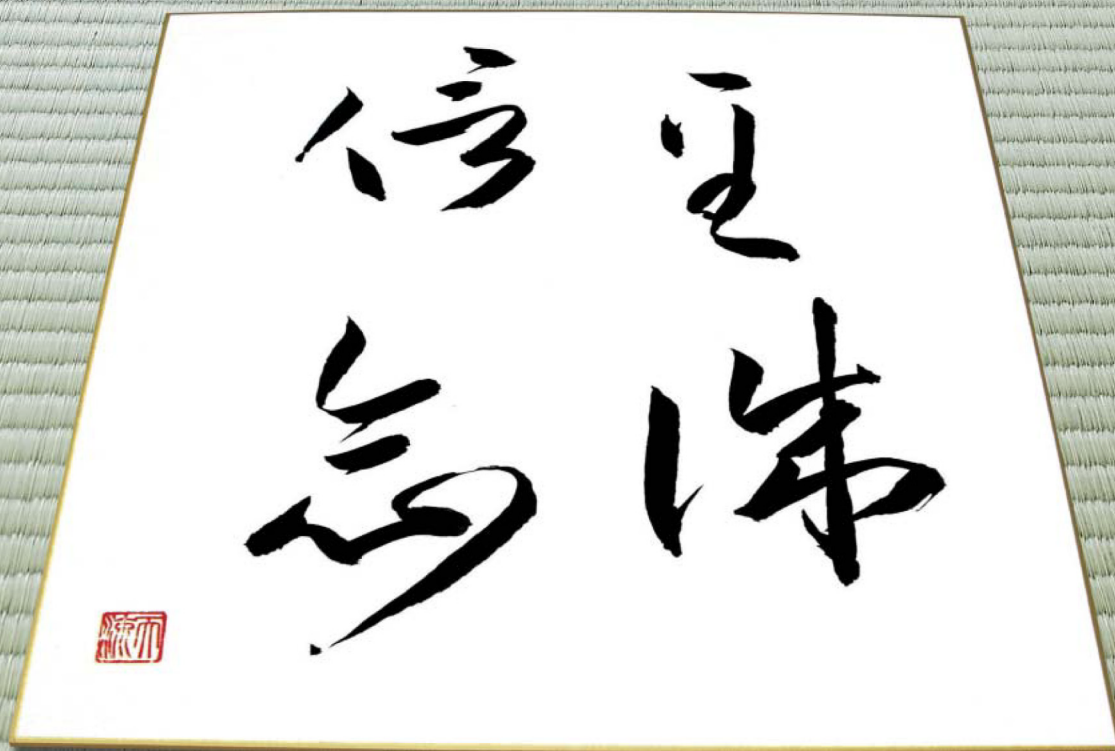
大阪 | 会報誌 2008 May vol. 3



(株)システックアカザワ 代表取締役

赤澤 洋平

私の座右の銘「至誠信念」



This interview 【今号の会員様インタビュー】

古希にジャズドラム  
コンサートを赤澤流  
“ソウルサウンド”で

(株)システックアカザワ  
代表取締役

赤澤洋平

# 古希にジャズドラムコンサートを 赤澤流“ソウルサウンド”で

赤澤 洋平 Yohei Akazawa

## 太鼓の鼓動は、母胎の“鼓動”

70歳(古希)になる5年後、ジャズドラムのプライベートコンサートを開くことにしている。会場はここガーデンシティクラブ大阪にお願いしようと思っている。今、モダンジャズの名曲「モーニン」やイブ・モンタンでおなじみの「枯葉」など10曲を猛勉強中だ。私なりの「ソウルサウンド」にぜひしたい。昔から和太鼓、ドラム、ティンパニーと打楽器の音になぜか気持ち共鳴した。佐渡が本拠の和太鼓チーム「鼓童」の演奏を聴くと、心底、魂を揺さぶられる。鼓童のホームページには、「和太鼓の響き、リズムは、母親の胎内で最初に聞く心臓の“鼓動”に通じる」とある。

## ロボットは中小企業の“自動車産業”

「大学在学中、父親が病死、家業の鉄工所を担わざるをなくなり、物理学科から機械科に転



## PROFILE

赤澤 洋平 氏 略歴  
1943年 大阪府生まれ  
1969年 近畿大学理工学部機械科卒業  
同年(株)赤澤鉄工所(現システアカザワ)入社  
1990年 同社社長  
1993年 横請け型企業連合体「G・A・T」結成  
2004年 ロボカップ世界大会「チーム大阪」初代監督として、  
チームを優勝に導く  
2007年 著書「ロボットおやじの“ものづくり”」(出版文化社)出版  
現在に至る

科した。指導教授は研究室で必要な加工機械の製作を卒業研究と認めてくださった。この先生との縁が、思えば今日のロボット事業につながった。家業の精密加工にはない機械製作における材料の調達から加工、組立・という工程の多様さ、複雑さや、それらのハーマニーの大切さを体験できたうえ、このような特徴を持った加工機械を所定の期間内に、満足のいく性能でつくりあげることができたという自信を持てたからだ。社長になつてすぐにバブルがはじけた。小さな部品加工会社とはいえ10社あまりの会社に協力してもらっている。そこで、この協力会社と下請けならぬ「横請け」連合体「G・A・T(ガッツ)」(頑張りまっせ・アイデア出しまっせ・得てもらいまっせ)をつくり、それぞれの強い技術の融合による新しい「モノづくり」をスタートさせた。多種少量の精密部品から成るロボットは、この延長線上の必然ともいべき製品で、その裾野の広がりか

## 終わりになき航海



「文明とは港ではなく航海である」(A・T・インビー)。作家の森本哲郎さんは、この言葉を引きながら「少しの油断や無意識の怠慢」が、有機体のたちまちの死をもたらす危険性に警鐘を鳴らしている。母胎内での母親の心臓の鼓動に通じるという打楽器の鼓動と、「母港」と表現されるように、母性にたとえられる港への思いを歌った美空ひばりの「港町13番地」をこよなく愛されるという赤澤さんは、一つの成功が安全な港を意味するのではなく、あくまで航海の途上にすぎないことを本能的に察知されているのではないだろうか。物理の先生という夢を断念、24歳から携わった家業の経営で、創業者譲りの「至誠信念」をモットーに、精密加工の下請け型企業から、その技術と、協力企業の技術を融合する「横請け型企業」へと、創造的破壊に成功された。しかも世界でも珍しい、中小企業による「ロボットチーム」を率いて、世界大会3年連続優勝という偉業も達成された。しかし、ひばりの歌とも異なり、この成功が赤澤さんにとっての長い「航海」の終わりでないことは、子供向けのロボット教室の開講やロボットクリニックの開院という形で次代への裾野づくりが何より雄弁に物語っている。



ら、中小企業における「自動車産業」に相当すると確信している。

チーム大阪の監督としてロボカップ世界大会3年連続優勝の栄に浴することができたのも、大学時代の経験から、ロボット進出を迷いなく決断できたからだ。かねての夢である一人住まいの高齢者のためのコミュニケーションロボットも今年の後半には、商品化できそうだし。

### いい出合いの場に

7年前、ジャズドラムを始めるきっかけになったのも、ある先輩経営者とのご縁であり、その方に案内していただいたライブハウスの経営者とのご縁からだ。以来、月3回毎回1時間、プロのドラマーによるマンツーマンのレッスンを受けている。「玩具のサルのシンバルのようやった」。教室恒例の年2回の発表会の初出演時の評が、3年後には「音数が増えて、素晴らしかった」に。ブルーノート、シンコペーションetc、ジャズ特有のリズムや旋律、

演奏法にとまどいながらも、マンションの自室のベッドに新聞紙を敷いての復習の成果もあつてか、

より高度な演奏の鍵となる基本フレーズの体得数を増やしつつあるところだ。6月には、ジャズの殿堂「ブルーノート」から替わった「ビルボード」で発表会が開かれるが、



私はステイックではなくブラシでの演奏を練習中の「枯葉」で参加する。旧ホテル阪神の行きつけの店だったオーナーのご縁で会員になったが、1デンシテイクラブ大阪だが、私のこれまでの人生経験に即し、アクティビティ・コミッティ委員として、さまざまな層のメンバー同士の、いい出合いをさりげなく演出できる空間づくりを通じて、フランクで温かみのある、人に勧めていただけるクラブを目指し、微力ながら尽くしたい。

そしてジャズドラムへの挑戦も。

「字が下手だったので、どこよりも早くオフコンやワープロを導入した」といわれる赤澤さんが結婚2日前(昭和45年1月3日)に密かにしたためられた墨書「洋平訓」を拜見した。「家庭円満」「1970年に己の真価を問う」「仕事は今年は2倍やれ」「放言をせざるべし」「い



つわりなき人生」「小人と類を同じうせず」「陽気な生活」「あくまで精進努力し心身健康にして、豊かに大望をなしとげること」「妻をいたわ

ることを忘れるべからず」以来38年、「この誓いに嘘はなかった」と、てらいなく言われる赤澤さんに感動するとともに、「ジャズドラマー「赤澤」がびったり重なった。

(編集子)